

J. S. バッハ/カンタータ第4番

《キリストは死の縄目につながれたり》BWV4

鈴木雅明指揮の同曲 CD[BIS CD-751] 添付解説・礒山雅氏 ([] 内は萩野注)、

復活節第1日のためのカンタータで、バッハの作品中でもとりわけ広く知られるもの。ミュールハウゼンでバッハが迎えた1708年の復活節のために書かれたと思われる。いずれにせよバッハは、ライブツィヒで1724年、25年と続けてこの作品を再演し、トロンボーンの重複声部を加えるなど、改訂の手を加えた。今日伝えられる源泉資料は、この再演時に作成されたパート譜である。終結コラールは、1725年の再演時から登場した。

このカンタータの特徴は、歌詞にルターのコラール(1542年)を全節そのまま使用し、音楽的にもすべての曲が、コラール旋律に基づいていることである。その意味でこの作品は、バッハがリュネブルク時代(1700-02)に手がけた、オルガン用コラール変奏曲(パルティータ)の延長線上にある。ルターのコラールは、テーマとなる復活を、受難の帰結、すなわち贖罪の完成として扱う。このため、「人の罪を身に受けての死」である受難の考察に多くのページが割かれており、その反映として、音楽も厳粛の気にもちている。シンフォニアの後、ルターのコラールを歌詞とした曲が7つ続く。それらは、生と死の格闘を描く第4節[第5曲]を中心に、シンメトリーを形成する。すなわち、第4節の前後には独唱曲(キリストの到来と死への勝利を歌うテノール独唱曲[第3節]と、受難を神への真のいけにえと解釈するバス独唱曲[第5節])が、その外側には二重唱曲(死の専制支配を嘆く第2節と、復活を輝かしい祭として祝う第6節)が、そして初めと終わりには合唱曲(受難と復活を告げる第1節と、信仰による新しい生を誓う第7節)が配される。こうして受難から復活に至る流れ、すなわち死の恐れを克服し生の喜びを獲得するまでの流れが、強い内面的な説得力をもって描き出されるのである。

萩野による解説補足 カンタータ第4番は、現存するバッハの教会カンタータとしては、最も初期のものだそうですが、それでも拙さが全くないというのは、昔演奏したカンタータ第106番や第131番同様です。また調性がホ短調中心で、コラール全節を色々な様式で変奏しているという点では、かつて取り組んだモテト“Jesu, meine Freude”との共通性を感じます。

原曲はルターの同名のコラールですが、更にその元はグレゴリオ聖歌の一種でカトリック・ミサの一部で歌われる *Sequentia*(続唱)のひとつ「*過越の犠牲(すぎこしのいけにえ)*」です(その曲が聴けるサイト: <http://www.geocities.jp/kawagoekyoukai/10-05-08.html>)。旋律的には最初の第1行の部分はルターのコラールに似ていますが、その後はあまり似ていたとは言えません。しかし歌詞はほぼこの原曲を踏まえたものであることがわかります。

音取り言葉付け的には「ヨハネ受難曲」並の難しさですし、今までやって来た「マタイ受難曲」や「クリスマス・オラトリオ」の様な明確な筋書きを持った歌詞ではありませんが、音楽そのものが非常に劇的に出来ているので、音取り言葉付けが完璧に出来たなら、結構人様に聴いていただけられるものになるでしょう。

歌詞対訳と演奏の方針・萩野

(対訳参考：上記・礒山雅氏の訳)

今回のBWV4に限ったことではありませんが、三澤先生の基本方針である、聴いてくださる人に感動を与える、あるいは何かを訴える演奏を目指すべく、以下のことに取り組みたいと思います。

1. 歌詞の意味の十分な把握 練習中に色々とお話してゆきますが、それ以上は今のところ皆様の工夫・努力をお願いするのみです。
2. ドイツ語の発音の徹底 これについては以下の3つをお願いして行きます。
 - ・長母音と短母音の歌い分け 短母音は基本的には音符の半分の長さとし、後半はそれに続く子音の発音に費やす。第2曲でも2分音符単位で歌うソプラノ以外の部分には応用したい。
 - ・子音の発音強化 持続系の子音は柔らかく長く、破裂系の子音は直前の一瞬のタメ、を各々意識する。そのためには舌と下顎の自由な動きが必須。
 - ・語尾の曖昧母音の発音 「下顎を落とす」と教わったが、本会でそうするとそれに伴う子音まで曖昧(不鮮明)になるので、口の横幅を広げないというやり方で整えたい。

1.Sinfonia 器楽:全て

昔は悲劇の真只中のような演奏もありましたが、基本的には復活を祝うに当たって、キリストの受難を振り返り、その意義を考える、という雰囲気が出せれば、と思います。

1. 2.Versus 1 – Chorus 器楽:全て

Christ lag in Todes Banden

für unsre Sünd gegeben,

er ist wieder erstanden

und hat uns bracht das Leben.

Des wir sollen fröhlich sein,

Gott loben und ihm dankbar sein

und singen halleluja.

Halleluja.

キリストは死の縄目につながれた、

私たちの罪の代償として渡されたのだ。

だが彼はふたたびよみがえり、

私たちに命をもたらせてくださった。

それを喜ぼうではないか。

神を讃え、神に感謝を捧げよう。

そしてハレルヤを歌おう。

ハレルヤ(主を賛美せよ)。

声楽・器楽とも全てマルカートでリズムにまとめたいたですが、声楽は歌詞に応じて雰囲気が変わります。2分音符単位で定旋律を歌うソプラノは十分余裕があるので、出来るところでは音符の最後の8分音符分くらいは子音の発音に費やしてください。歌詞第1・2行は受難を語る部分ですので、キーワードの発音には受難の痛み・悲しみなどを込める必要があります。歌詞第3・4行からは復活を告げ、それを喜ぶ部分です。下3声のコラール旋律模倣部分は主役意識を持って歌ってください。ベースの第22小節の最初の音が取りにくいのですが、第21小節の休みの間通奏低音パート(ピアノ伴奏の左手パートのうち棒が下に付いている音符)を歌うとうまく行きます。歌詞第5行の“fröhlich”に当てられた16分音符は軽く歌ってください。第58小節以後の“halleluja”は、8分音符のみのパートは脇役ですので、軽く控えめに。

3. Versus 2 - Soprano, Alto 器楽: チェロとオルガン

Den Tod niemand zwingen kunnt
bei allen Menschenkindern;
das macht' alles unsre Sünd,
kein Unschuld war zu finden.
Davon kam der Tod so bald
und nahm über uns Gewalt,
hiegt uns in seinem Reich gefangen.
Halleluja.

死に打ち勝てる者は誰もいなかった、
どんな人の子のうちにも。
これもみな、私たちの罪ゆえだった。
咎のない者は、一人として見あたらなかった。
そこで死はたちまちにやってきて
私たちへの権威を打ち立て、
私たちを自分の国につなぎ止めた。
ハレルヤ。

死の支配が主題ですので、それに伴う悲しみ、絶望感などが描ければと思います。歌い方はレガート主体。頭の"Den Tod"と第3行頭の"das macht"の2声の掛け合いは、2回目をp(ピアノ)とするエコー方式にしましょう。

4. Versus 3 - Tenore 器楽: ビオラ以外の全て

Jesus Christus, Gottes Sohn,
an unsre Statt ist kommen
und hat die Sünde weggetan,
damit dem Tod genommen
all sein Recht und sein Gewalt;
da bleibt nichts denn Tods Gestalt,
den Stachel hat er verloren.
Halleluja.

イエス・キリスト、神の子が
私たちの身代わりとしてやってきて、
罪をぬぐい去ってくださった。
それによって死から取り去られた、
裁きと権威とが、ことごとく。
いまや死は影を残すのみとなり、
そのとげは失われた。
ハレルヤ。

キリストが死を打負かす部分ですので、器楽・声楽とも攻撃的な雰囲気を出したいです。ただし adagio 部分は例外です。adagio 部分のテンポは目安として allegro 部分の半分とすると演奏しやすいでしょう。第31小節の"Stachel"は"Sta-"と"-chel"を付点8分+16分的に処理してください。

5. Versus 4 - Chorus 器楽: 通奏低音

Es war ein wunderlicher Krieg,
da Tod und Leben rungen;
das Leben da behliet den Sieg,
es hat den Tod verschlungen.
Die Schrift hat verkündigt das,
wie ein Tod den andern fraß,
ein Spott aus dem Tod ist worden.
Halleluja.

驚くべき戦いが起こり
死と命が戦った。
命が勝ちを占めて、
死を呑み込んだ。
聖書が告知していたではないか、
ひとつの死が他の死を食らうと。
死はかくてあざけりの的となった
ハレルヤ。

死と命の戦いの様なので、これもマルカートでリズムックに。雰囲気はこの曲も攻撃的に。

6. Versus 5 - Basso 器楽: 全て

Hie ist das rechte Osterlamm,

これぞまことの過越の小羊、

davon Gott hat geboten,
das ist hoch an des Kreuzes Stamm
in heißer Lieb gebräten.
Das Blut zeichnet unser Tür
das hält der Glaub dem Tode für,
der Würger kann uns nicht mehr schaden.
Halleluja.

神がお定めになったもの。
そは十字架の幹高く掲げられ、
熱い愛の炎で焼かれたのだ。
その血は、私たちの家を区別するしるし。
それを信仰は、死に向かって突きつけるのだ。
殺害者も、もはや私たちを傷つけられない。
ハレルヤ。

受難の意義を説く部分で、基本的にはレガート主体で良いでしょう。歌詞第5-7行は出エジプト記第11-12章の過越に触れています。独唱はこの低音を良く響かせることの出来る人(長谷川顯さん?)が必要です。

7. Versus 6 - Soprano, Tenore 器楽:チェロとオルガン

So feiren(*) wir das hohe Fest
mit Herzensfreud und Wonne,
das uns der Herr erscheinen läßt.
Er ist selber die Sonne,
der durch seiner Gnaden Glanz
erleuchtet unsre Herzen ganz,
der Sünden Nacht ist verschwunden.
Halleluja.

かくて私たちは、この尊い祭を
心から喜びと楽しみをもって祝う。
この祭を主は、私たちに輝かせてくださった。
主は太陽そのもの、
それはみ恵みの輝きをもって
私たちの心をあまねく照らし出す。
罪の夜は消え去った。
ハレルヤ。

*feiren 今日では”feiern”。J. S. バッハ存命時代辺りまで使われていた古語と思われる。

復活の喜びを祝う部分。弾むような通奏低音が特徴的です。全てのタイミングは2重唱の中の3連符に合わせ込みましょう。

8. Versus 7 - Chorus 器楽:全て

Wir essen und leben wohl
in rechten Osterfladen;
Der alte Sauerteig nicht soll
sein bei dem Wort der Gnaden.
Christus will die Koste sein
und speisen die Seel allein,
der Glaub will keins andern leben.
Halleluja.

食べて、命のよき糧としよう、
まことの過越のパンを。
古いパン種が
恵みの御言葉のもとにあってはならぬ。
キリストは自らを糧とし、
魂のみを養ってくださる。
信仰は、ただそれによってのみ生きるのだ。
ハレルヤ。

新たな信仰と命を手に入れた喜びが支配的な中で、歌詞第3-4行が古い信仰を排除する内容となっています。また歌詞にはパンと食べることに関係する単語が随所にあるのも興味深いです。今回はこのような4声コーラルでも、言葉をしゃべる時と同様の長短母音の歌い分けを試みます。第14小節は少し rit の後フェルマータは長く伸ばし、第15小節は元のテンポで、第16小節から再びして大きく rit の後フェルマータとする予定です。